

矢滝城跡

矢滝城は、16 世紀に石見銀山と物資の主な供給源であった温泉津港を結ぶ道を防御するために築かれた 2 つの山城のうちのひとつです。この山城は、1528 年、当時この地を支配していた戦国大名、大内義興（1477-1529）がこの道の南側の高台に築城したものです。海拔 634 メートルの細長い山頂の全体を占め、その周囲には石垣や堀切などの要塞が築かれていました。頂上の北端に築かれた矢滝城の円形の手守からは、道路と、反対側の矢筈城を何にも遮られることなく眺めることができました。

武家間の同盟や対立が絶えなかった 1500 年代には、石見銀山を巡って戦国大名たちが争ったために何度もその支配者が変わりましたが、1600 年代初頭に石見銀山が徳川幕府に乗っ取られてからはその重要性がなくなっていました。その後長期間続いた平和な時代により、矢滝城をはじめとする中世城郭が徐々に廃城となっていきました。矢滝城の遺構は、第二次世界大戦後、米軍のレーダー基地（後に放送送信施設に置き換わった）用の空間を確保するために山頂の平坦な部分が拡張されたことを理由のひとつとして、現在ではほとんど残っていません。山頂へと続く登山道を登るには 1 時間とかかりません。